

Title	アルタイ語族論と語彙統計学
Author(s)	リゲティ, ルイ; 橋本, 勝
Citation	大阪外国語大学学報. 33 p.81-p.96
Issue Date	1975-01-31
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80542">https://hdl.handle.net/11094/80542</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# アルタイ語族論と語彙統計学

ル イ ・ リ ゲ テ ィ

橋 本 勝 訳注

Л. ЛИГЕТИ, АЛТАЙСКАЯ ТЕОРИЯ И ЛЕКСИКОСТАТИСТИКА

Перевел и комментировал Масару ХАСИМОТО

This paper is a translation of an article written by Prof. L. Ligeti, “Алтайская Теория и Лексикостатистика” 《Вопросы Языкознания》- one of the most typical journals of linguistics in the USSR - Moscow, 1971. No. 3 pp. 21-33.

In this present article, Prof. Ligeti expresses an opinion on the Altaic theory, opposing Sir G. Clauson's idea advanced in his article “Лексикостатистическая Оценка Алтайской Теории” *op. cit.*, 1969. No. 5. pp. 32-41.

Prof. Ligeti definitely states that *lexicostatistics* or *glottochronology* will not decide on the Altaic studies in the future.

堂々たるトルコ語学者で且つ積極的な「アルタイ語族論」(Altaic theory)の反対者である Sir G. Clauson は、以前に《Вопросы Языкознания》誌上に討議に注意を向けさせる興味ある論文を発表した。その論文の中で彼は、アルタイ語族論に対して新たな攻撃を試みてこの理論は、誤りであり受諾し難く、拒否されねばならないと言う事を「語彙統計学」(Lexicostatistics)の方法によって証拠立てようとした。<sup>(1)</sup>

雑誌編集局の討議に加わる再三の招待を受けて私は、アルタイ語族論に関する自己の見解を簡単に述べる。私の意見は、G. Clauson の論争的な論文に直接、間接に提起された問題に関して分類されよう。

アルタイ語族論の見地より「言語年代学」(Glottochronology)つまり語彙統計学によって利用され且つ「基礎語彙」(Basic vocabulary)の最も重要な単位と見做される概念記号を含む夫々 100 個の単語 (図表3, pp. 33-37参照) よりなる二つの目録から何を期待し得るのか?

併し、この問題をよく考慮してみる前にもっと一般的な問題を提起する必要がある。即ち、唯、語彙表示だけを基礎にして本質的にアルタイ語族論の明確化へ到達する事が出来るであろうか?

これら (語彙) の表示が非常に価値あると言う事については疑念は、ないが、アルタイ諸語の

注 (1) Дж. Клоусон, Лексикостатистическая оценка алтайской теории, Вопросы Языкознания, 1969. No. 5. (この論稿に関するこれ以上の引用は、原文に示される。)

親族性に関する問題の解決に際して音声及び文法範疇の研究を脇へ置去りにしたまま唯、この語彙だけに基づいて良いとは私は、考えない。この方法が他の任意の語族の研究にとって確実な根拠があるとは思わない。<sup>(2)</sup> 更にこの方法は、私には容認し難いように思われる。そこで問題は、アルタイ諸語の親族性についてである。アルタイ語研究史が我々にこの事を納得させる。

此处で音声論の範囲に関する唯一の問題つまり *Rhotacism* と *Lambdacism* について注意すれば十分であろう。実際 Z. Gombocz の以前の説に G. J. Ramstedt の提出した説が対照された。それを通常 *Zetacism* 及び *Sigmatism* と称している。少数意見が常に主要な代表者を占めたとは言え彼 (Ramstedt) の後継者の絶間ない努力のお蔭で Ramstedt 説は、殆んど全体的に広まった。明白に、正に音声の日付に属するこの問題の宿命は、Ramstedt としてはアルタイ語説支持によって予め定められたが、その為に彼は、一度ならずアルタイ語同系の為の論拠を *Zetacism* に求めた。音声の見地からすれば両方の説明が可能である。併し、もし *r, l* が本源的な *z, š* に遡及するとする以前の Gombocz の説<sup>1)</sup>を理解したならば (併し、後に Gombocz 自身、Ramstedt の解釈に傾いた。) 次の状況が成立つ。原始チュルク語 (Proto-Turkic) では従って *z* と *š* が確立するが、これらの子音は、チュワシ語では一定の位置に於て *r* と *l* で表わされる。これは、明瞭且つ簡単である。(ツングース・満州語についてはさて置き) モンゴル語で *r* と *l* を解釈しようとする時、困難となる。極端な場合にはモンゴル語に於ける *r, l* は、チュワシ語から独立して発達したと仮定する事が出来る。併し、その時にはどうしても自らに問わねばならない。つまり何故それら (*r, l*) が特にチュルク語正しくはチュワシ語に存在するような単語に現れるのであろうか? と。*r, l* を保持するモンゴル語の諸単語は、チュワシ語より借用されたが、それらが、50年前にこの問題に答えた。それにも拘らず、それに加えて何らの年代学的及び地理学的資料によっても擁護されなかったこの仮説は、アルタイ語族論としては重要な結果を有し得た筈である。実際この仮説は、どうやらチュルク語とモンゴル語の対応の最古層に触れるようである。同時にモンゴル語がチュルク語 (正確にはチュワシ語の祖先) より *r, l* を伴う語だけを借用したとは仮定出来ない。もしこれらの単語を削除するならばチュルク、モンゴル語族ましてやアルタイ語族が頼り所とし得るような語彙的資料は、殆んど残らない。この故にここの仮説は、結果を有しなかったしその著者によってさえ置去られたままである。<sup>(3)</sup> もし *r, l* がチュルク語に本源的であったと言う考え方に Ramstedt と共に依拠するならばチュワシ語は、原始チュルク語の状態を変化なしに保持し且つ他のチュルク諸語に於ては *z, š* に変化したと推論すべきであろう。原始モンゴル語の状態がそこで保持され且つ原始チュルク語及び原始モンゴル語の *r, l* の起源を前述のアルタイ語の共通性に求めて何等差支えあるまいからこの場合モンゴル語の状態は、注釈を要しなかった筈である。

このように Ramstedt の説明は、アルタイ語学的見地からすれば独創的であり又モンゴル語

(2) A. Meillet, *Linguistique historique et linguistique générale*, Paris, 1958. p. 46. 参照

(3) J. Németh, *Die türkisch-mongolische Hypothese*, ZDMG. LXVI. 4. 1912. 参照

学の見地からすれば全く充分なものである。

此処でチュルク語の見地からすると通常、黙殺したり実際に遠ざけるのが全く厄介であるような困難が生ずる。即ち、言語変化としては他のチュルク諸語より浸透性のあるチュワシ語が何うして本源的な言語状態を保持出来たのか？ その後、改変が入り得たのであるが、《変化に並はずれて抵抗的な》(p. 31) 他のチュルク諸語とは一体、当時何であったか？ G. Clauson は、この問題について明確に意見を述べなかったが、それは、Ramstedt の解釈の影響によるものではなく、彼 (Clauson) は、この言語的発展の計量的見地の由来をはるか過去1500年の時代 (p. 30 参照) に求めているように思われる。ありのまゝに研究者に考慮される統計資料を別様に扱う事は、困難であつたろう。

それでもやはりそのような仮説を受入れた人にとっても、モンゴル語の (疑問である) 単語が起源的な関係の足跡ではなくチュルク語からの借用に起源すると考える人にとっても二つの可能性の間の選択が残されている。又、原始チュルク語に出発点にて r, l が存在し借用は、z, š を伴うチュルク語が未だ存在しなかったような遠い時代に遡及する事を彼は、認める。そして大胆だが、少しも不合理でない解決に彼は、賛意を表している。即ちそれは、モンゴル語が (母音間及び音節末に於て) 本源的に z も š も有していなかったし、その後自己の特徴的な音声組織の中でこれらの子音を同化し、それらに r, l を以て代えたと言う認識より成立っている。従って、この仮説は、チュワシ語や一般のアルタイ諸語に関せずモンゴル語の状態を解釈しようとしている。Rhotacism と Lambdacism, Zetacism と Sigmatism の問題に従って展開された討論は、この論文の範囲を越えるものである。<sup>(4)</sup> 今、問題を語彙に向ける。此処で問題は、二つの側面を持っている。問題は、第一に G. Clauson の提出した資料や論証がアルタイ語族論を明確化するか、或は不審を抱かせるか。第二に語彙統計学の方法がそれ自体言語的同系の確認として役立つものか、或は反対に言語的同系の論駁に有効なのかどうかと言う事である。

二つの目録により図表3に記されている夫々三欄付きの資料(pp. 33-37)は、如何なるものか？

図表3のチュルク語の目録資料は、一千年以前の状態を基本的には表示している。現在利用し得るものの中最も古い文語的原典は、同質性からかけ離れていながら方言的分化の充分な発展を確証する状態を知らせ得る。モンゴル語の最古の原典は、700年の期間を経ている。西暦13世紀の「元朝秘史」では15世紀のムカディマツ=アル=アダブ (*Muqaddimat al-Adab*) とは別の方言が示されている。満州語は、ツングース・満州語群が可成り弱く反映する300年以前の文語文献を有する。それに加えて満州語は、死滅して早くに姿を消した文語で書かれた。<sup>1)</sup>

従ってこの三言語にとって計量点は、色々の年代学的なレヴェルで目論まれる。図表3の夫々の表は、異質の要素から成っており従ってそこに基本付けられている結論は、既に先験的にそれ

(4) 最近、この問題に献じた労作より、O. Pritsak, Der «Rhotazismus» und «Lambdazismus», *UAIb*, 35, D, 1964; T. Tekin, Zetacism and Sigmatism in Proto-Turkic, *Acta Orient. Hung.* XXII, 1, 1969 (この場合は参考書目参照) 参照

自体の中に誤った基を含んでいる。併し、それが広範囲の時間的深度を含み乍ら適当な近似値へ到達する事が出来るならばそれ以上のものがない為此の見地に傾く事になる。図表3の二つの目録即ち「診断上の単位」《Диагностические единицы》と「補足的単位」《Дополнительные единицы》に触れる自己の所見に於て筆者は、語彙統計学的研究の通常の方法に倣った。対応が、起源的特徴を有するのか或は借用に起源を置くのかと言う問題は退けて置いた。<sup>(5)</sup> 筆者が確信を以てアルタイ諸語に於て起源的対応と借用をととも識別出来かねる事によって尚更、この方法は、正当化された。同様にこれらの要素は、アルタイ語仮説の本質に関係がないので筆者は、キルギス語、ヤクート語及びシベリヤのチュルク諸語に於けるモンゴル語の諸要素を考慮に入れない。併し、満州語に於けるモンゴル語の諸要素は、言語的相互関係の年代を明確化する為に特別な意味を持っているので筆者は、それらを考慮する。

二つ乃至若干の親族語の語彙を言語年代学的研究に於て比較し乍ら語源的相関関係ではなく現代の「基礎語彙」で意味論の見地より同等の位置を占める単語を比較対照している。言い換れば英語の head 《頭》の equivalent は、ドイツ語では語源の見地でそれと対応する Haupt ではなく Kopf である。<sup>(6)</sup> 恐らく言語年代学的比較対照に基づいて為された結論は、起源的見地からすると価値がないであろう。(もし、フランス語、tête 《頭》、ラテン語、caput、同、ロシア語、голова、同、を同系或は非同系関係の確認として比較するならばこれらの三言語、広く言えば印欧諸語は、非同系語と言う事になる。)

それにも拘らず、図表3に提出された二つの目録に基づいた言語年代学的な語彙の比較対照の有用性を認める事を筆者は、拒否しない。併し、先ず第一にこの目録による言語年代学上の単語の区別の為に見えなくなる真の起源的関係を研究する必要がある。アルタイ語研究に於て語源的同一語根を有する語群に入るようなアルタイ語の諸要素が如何なるものかと云う問題が未解決である事によりそのような扱いは、尚更理由付けられた。

言語年代学的対応によって対比される語源的対応の若干の例を引く。

チュルク、kögüz 《胸、女性の胸》、チュルク語と不可分の(チャガタイ語) kökräk 《心臓》、《胸》、köksäk 《胸》 köküü 《哺乳する事》は、モンゴル語では č'e'ejī (図表3の No. 7) と並んで語源的対応として kökō 《女性の胸(乳房)》が、一方、ツングース・満州語では満州、xuxun 《1. 胸、2. 乳》、ウデヘ、オロチ、uku、ネギダル、ukun、エヴェンキ、ukun、xukun、xukuxu、エヴェン、uken がある。その代り真の対応によればモンゴル、č'e'ejī 《胸腔》 č'egeji 《胸、胸の上部》(それは、図表3でチュルク語 kögüz に対比される)は、満州語では č'ejen 《胸腔の上部》であって図表3のように tunggen ではない。成程、アルタイ語学者には、この点について他の意見がある。その意見に依ればモンゴル語 č'egeji は、語源的にナナイ語、オルチャ語の tungge-

(5) D. H. Hymes, Lexicostatistics so far 《Current Anthropology》 January 1966. p. 30: 《統計的方法は、借用による類似と起源的關係による類似との区別をしない》

(6) D. H. Hymes, *op. cit.*, p. 18.

(n), オロッコ, *tunge*, オロチ, ウデヘ, *tĩnge*, ネギダル, エヴェン, *tĩngen*, ソロン, *tĩngge(n)*, エヴェンキ, *tĩngen* と共に満州語の *tunggen* 《胸》に属する。<sup>(7)</sup>

チュルク, *topraq* 《土, 塵埃》(図表3に於ける No. 12) は, モンゴル語の *tobray*, *toburay*, *toγuray* と関係がある。(G. Clauson がこれと対比したモンゴル語, *köser*, *široi* を比較)。このグループには当然チュルク, *tōz*, モンゴル, *toγasun*, *to'osun* が属する。

チュルク, *qıl* 《毛》(No. 21a) チュワシ, *xələx* は, モンゴル語で語源的に *kilyasun* 《1. 馬毛, たてがみ; 2. (楽器の) 絃》, *kilqasun* 《(馬の尾の) 毛》に対応する。(cf. 図表3のモンゴル語, (h)üsü) 今度は, モンゴル, *hüsün*, *üsün* 《毛, (身体の) 毛》(ダグール,<sup>iii</sup>) *xuzu*, Ts. *xüs*; モンゴール, *fuDze*) は, *fuñexe*, *fuñixe* <\**fuñirxe* と読める満州語の *funiyexe* 《毛》と全く規則的に相関する。<sup>(8)</sup> モンゴル, *γar* 《手》は, 語源的にチュルク, *qar* 《腔の上部; 肩》(cf. チュルク *elig* —図表3の No. 22) と結び付けるべきである。<sup>(9)</sup>

モンゴル, *teri'ün* 《頭, 頂き; 始め》(No. 23) は, 図表3のように語源的に満州語の *uju* と見做す事は出来ない。(cf. 女真語 *uju*, 同, 女真語, *UjU*, 12世紀の女真語 *uju*<sup>(10)</sup>) これは, 満州語の *deribun* 《始め, 発生》と結び付けるべきである。意味論の見地よりこのグループにはモンゴル語で興味ある語が関連しなければならない。即ち「元朝秘史」では *heki* 《頭》, モンゴル文語, *ekin* 《始め》, ダグール語, Ts. *xe'k'in* 《頭》, Iv.<sup>iv</sup>) *xe'ki*, モンゴール語, *xęGi* 《源, 始め》。このモンゴル語の単語は, 語源的に満州語の *fexi* 《1. 頭, 知力; 2. 記憶(力)》と相関しなければならない。この単語の他の(疑わしい)対応は, チュルク語の *māñi*, *māyi*, *bāyi* 《脳(髄)》; ハンガリー語の *fej*, *fő*, フイン語, *pää* である。<sup>(11)</sup>

チュルク, *bünüz* 《角》(*münüz*, *müjüz*, *mügüz*, *miniz*) は, モンゴル文語, *mögeresün* 《軟骨》, カルムイク, *mörsn*<sup>v</sup> 《軟骨, 軟骨や角の種類》(併し, モンゴル語, *eber* 《角》を比較。図表3の No. 25) と結び付く。ツングース・満州語では更に満州, *buge* 《軟骨》; ナナイ, オルチャ, オロッコ, *bukse*, オロチ *uskē*, エヴェンキ, *bukse'kēn* 《軟骨》がある。<sup>(12)</sup>

チュルク語, *tiz* (*diz*) 《膝》(ハンガリー語, *térđ*) は, 語源的にモンゴル文語, *ebüdüg* (図表3の No. 26) とではなくモンゴル文語, *türei* 《長靴の脛部》, カルムイク語, *türē id.* と関連する。他の equivalents は, 満州語 *ture* 《長靴の脛部》, ナナイ語, *turęxse*, 《長靴の脛部》オ

(7) G. J. Ramstedt, *Einführung in die altaische Sprachwissenschaft* I. Lautlehre, Helsinki, 1957, p. 120. 参照

(8) 相似た比較は, P. Pelliot, Les mots à h initiale, aujourd'hui amuie, dans le mongol des XIII<sup>e</sup> et XIV<sup>e</sup> siècles, *JA*, 206, avril-juin. 1925, p. 234; Г. Д. Санжеев, Мамчыжуро-Монгольские языковые параллели *ИЗв. АН СССР* VII Серия-Отделение гуманитарных наук, 8-9, 1930, p. 702. 参照

(9) この語に相似た比較は, G. J. Ramstedt, *op. cit.*, p. 48. 参照

(10) L. Ligeti, Mots de civilisation de Haute Asie en transcription chinoise, *Acta Orient. Hung.* I. 1950, p. 158; 他のツングース・満州諸語に於ける対応は, G. J. Ramstedt, *op. cit.*, p. 125. 参照

(11) Lakó Gy., *A magyar szókészlet finn-ugor elemei*, I. pp. 188-189. 参照

(12) Г. Д. Санжеев, *op. cit.*, p. 688; G. J. Ramstedt, *op. cit.*, p. 120. 参照

ルチャ, tinekşę, オロッコ, tureşķę, オロチ, tijaksa, エヴェンキ, tıręķşę, turej, tıręķte, tıręķşę, tıręxę.<sup>(13)</sup> 満州語, buxi<sup>(14)</sup> 《大腿, 腰部》(buxi adame te- 《腰掛ける》) は, 図表 3 に於てチュルク語の tiz と対照されるが, 語源的にはモンゴル文語の bōke 《小骨遊びの突起した端》, カルムイク, bōkō 《小骨遊びの背面部》, ブリヤート, bōxê 《胴の後部, 尻》と相関する。<sup>(14)</sup> 此処ではモンゴル文語 bōgse 《尻》, カルムイク, bōksō 《(動物の) 後足, 背部, 尻》等々と見做されねばならない。満州語, buksu 《背の下部, 尻の下部》も参照。

モンゴル語, qangsiyar, qongsiyar 《鼻の上部, 鼻梁; 鼻面》は, 満州語 qangsari, qangsiri 《鼻梁》と同様にモンゴル語, qabar, qamar 《鼻》(No. 37) と不可分である。<sup>(15)</sup>

モンゴル語, huja'ur, ijaγur 《根, 起源》は, 図表 3 に於て満州語 da (No. 41) に対比されるが, 語源的には満州語, fuǰuri<sup>(16)</sup> と対応する。

チュルク語, qum 《砂》(語源的にモンゴル語, elesün と両立し得ぬ。—cf. 図表 3 の No. 42) は, モンゴル語, qumaγ, qumaki<sup>(17)</sup> 《小さい砂, 砂粒, 水っぽい埃》, カルムイク語, xum 《砂, 埃》, xum<sup>18</sup> 《細塵, 砂粒》と相関する。チュルク語 qayır 《砂》は, 同様, 図表 3 に於てモンゴル語の elesün と対比されるが, モンゴル語の qayır 《砂利, 粗砂, 河川の小石》と対応する。

図表 3 に於けるチュルク語の uruγ 《家族》は, モンゴル語の hüre (No. 34) と同列にあるが, 元朝秘史に於ける uruq 《親類, 母方の親戚; 氏族, 種族》と結び付く。それと同時に図表 3 で満州語 use 《種子》に対比されるモンゴル語, hüre 《種子》(モンゴル文語, ür-e 《果実, 子孫》)は, 満州語, furi,<sup>(18)</sup> fursun 《穀物の若芽, 花や相似た草木; 増加, 発達》ナナイ, puril 《子供》オルチャ, purul, ネギダル, xuil, ソロン, uril, エヴェン, xurel と結び付く。<sup>(17)</sup>

モンゴル語, kelen 《舌, 言葉》(No. 50) は, kele- 《話す, 通知する, 述べる, 呼ぶ》, kelegei 《啞の; どもり》と共にチュルク, käläji, käläčü 《語》, チュワシ, kala- 《話す》及び満州語, xele, xelen<sup>(19)</sup> 《話す能力; 探偵》に語源的対応を為す。<sup>(18)</sup>

モンゴル語, modun 《木》(No. 52) には満州語 moo (= mō) が完全に語源的対応を為す。同様にナナイ, オルチャ, オロッコ, オロチ, mō, エヴェンキ, mō, ソロン, ネギダル, エヴェン, mo を比較。<sup>(19)</sup>

(13) G. J. Ramstedt, *op. cit.*, p. 112. 参照

(14) Г. Д. Санжеев, *op. cit.*, p. 688. 参照

(15) *Ibid*, p. 675. 参照

(16) P. Pelliot, *op. cit.*, p. 223; Г. Д. Санжеев, *op. cit.*, p. 703. 参照

(17) G. J. Ramstedt, *Ein anlautender stimmloser Labial in der mongolisch-türkischen Ursprache*, JSFOu, XXXII, 1916-1920; P. Pelliot, *op. cit.*, p. 237. 参照

(18) G. J. Ramstedt, *Einführung...*, I. p. 47 この語のフィン・ウグール語及びサモエード語の equivalents は, Ligeti L., *Mongolos jóveneszavaink kérdése*, NyK, XLIX, 1-3, 1935, pp. 258-259. 参照

(19) 森林の多い地域に居住する人々が中国語から《森》の意の単語を借用したとするなら奇妙であろう (G. Clauson, *op. cit.*, p. 40. 参照); それに加えてそのような借用は音声的見地からしても認め難いであろう。何となれば語末子音 (ch. *mu*, old ch. *muok*) は, 9世紀以後には消失したからである。

チュルク語, ar-qa 《(身体の) 背》(図表 3 の No. Д. 3) は, ar-t id. と共にモンゴル語, aru 《背; 背後》と語源的に結び付く。その他の対応は, ウデヘ, aka 《背》オロッコ, atta, オロチ, akka, ネギダル, ajkan, エヴェンキ, arkan, エヴェン, arkan。<sup>(20)</sup>

図表 3 でモンゴル語 de'esün, degesün (Д. 25) に対比された満州語, futa 《繩, 撚紐》は, モンゴル語, hutasun, utasun <sup>x1)</sup> 《撚紐, 糸, 絹糸》と規則的な対応を為す。<sup>(21)</sup>

モンゴル語, hon, on 《年》—図表 3 に於て満州語 aniya と同列にある一は, 満州語 fon 《時; 時節》に語源的対応を為す。<sup>(22)</sup>

モンゴル語 (元朝秘史) köbši-<sup>x11)</sup> (正確には köši-) 《凍る》モンゴル文語, kösi- 《(死体について) 硬ばる》, カルムイク, köš- 《硬ばる, 麻痺する; 気分が悪い, 不健康である; 死ぬ》は, 先ず図表 3 に於てチュルク語 tong- (ton-) に対比されるが, 実際にはチュルク語 kös-ü-l- に対応する。同時に此処に導かれる満州語, beye- 《凍る》(更にナナイ, beje- 《凍る》オルチャ, bei-, ネギダル, begi-, エヴェンキ, begi-, bei-<sup>x111)</sup> エヴェン, begi-, bei-<sup>x112)</sup> を比較) は, 語源的にモンゴル語 begere- 《完全に凍る, 硬ばる》カルムイク, bër- 《硬ばる(寒冷の為)》に対応する。<sup>(23)</sup>

どんな言語も不変の語幹を有する単語によるだけでなく派生語によっても自らの「基礎語彙」に一致する概念を表現する事が出来る。派生語は, 非常に古い可能性があり, ある場合には祖語からの分離に直接後続する時期に生ずる可能性がある。祖語の「基礎語彙」が検討される時, 明らかにこれらの派生語は, 勘定に入れないで派生語が生じた元の単語だけが入れられる。

アルタイ語族論の見地からして印欧諸語よりはるかに示唆的であるフィン・ウグール諸語の中から若干の例を取出させて頂く。この場合, 問題は, 動詞 csill-og 《光る》からの派生についてであるが, ハンガリー語の csillag 《星》は, 明らかにハンガリー語の基礎語彙に属する。フィン・ウグール語学的見地からすればこの場合, やはり動詞のみが《基礎的》と見做し得る。何故ならばこの形式で然もこの意味を持つ名詞は, ハンガリー語の存在と無関係の時に既に出来上っていたからである。<sup>(24)</sup> 同様な事が名詞の vér 《血》より構成されたハンガリー語の形容詞 vörös 《赤い》についても言う事が出来る。<sup>(25)</sup>

G. Clauson の作成した図表 3 には, かような諸例の大部分が入っている。各個, 別々に取られた例は, 正しく, チュルク語 (同様にモンゴル語, 満州語) の「基礎語彙」にこれを含める事に反対は, 出来ない。併し, アルタイ語の基礎語彙の見地よりすれば (もしも何時かかくの如きものが存在したとするならば) 結局, 大部分の場合についてこの語が語根であるとは言えない。此処に若干の例を挙げると,

(20) G. J. Ramstedt, *Einführung...*, I. p. 139. 参照

(21) P. Pelliot, *op. cit.*, p. 225; Г. Д. Санжеев, *op. cit.*, p. 702. 参照

(22) P. Pelliot, *op. cit.*, p. 218; Г. Д. Санжеев, *op. cit.*, p. 702; G. J. Ramstedt, *Einführung...*, I. p. 53. 参照

(23) G. J. Ramstedt, *Einführung...*, I. p. 91. 参照

(24) Lakó Gy., *op. cit.*, I. pp. 117-118. 参照

(25) Barczy G., *Magyar szövejtű szótár*, Budapest, 1941, p. 342. 参照



チュルク語, aγiz 《口》(No. 33) は, 単語 aγ 《口, 孔》の派生語である。<sup>(26)</sup> 同様にモンゴル語, aman 《口》も派生語である。それは, モンゴル語, angγa-yi- 《開く》カルムイク, angγe-<sup>xv</sup> 《(口を)開けて置く》angā- 《開けている, 隙間がある》と不可分だからである。同様な事が満州語, angγa 《口, 咽喉, 孔, 穴, 隙間》についても言い得る(更に満州語 angγa と明代女真語 amga, 金代女真語 amṅa を結び付けるべきである<sup>(27)</sup>)。ツングース・満州語の対応形式は, ナナイ, オルチャ, ウデヘ, オロッコ, angma, オロチ, ソロン, amma, ナナイ, オロッコ, ネギダル, エヴェン, amnga, エヴェンキ, amnga である。<sup>(28)</sup>

チュルク語 soγuq 《冷たい》(No. 58) は, 派生語でありその語根語(корневое слово) soγ- 《冷える》が次の単語即ちモンゴル語 soyi- <\*soγi- 《馬を冷やす》, 満州語 soyō- 《冷えるように汗だらけの馬や去勢雄牛を縛りつける》と対応する。<sup>(29)</sup>

チュルク語 yašil 《緑》(No. 62) は, 派生語である。と言うのは, その語根語は, yaš 《新鮮な, 若い》であるからだ。モンゴル語の単語には二つの意味が結び付けられた。即ち, 元朝秘史に於ては noqo'an 《新鮮な青草》モンゴル文語では noγoγan 《緑, 草の緑, 草, 野菜; 緑色の》; カルムイク, noγān 《草, 緑の》である。モンゴル語の単語に満州語の niowanggiyan 《1. 緑色の; 2. <sup>xvi</sup> 青緑色の, 空色の》が直接に結び付く。当該の満州語は, 正字法的に形式 *noaγān* に遡及する *ngangian* なる発音に対応する。cf. 女真語形では *ŋO-gian* 及び *ŋongian*。

チュルク語の派生語 qizil 《赤い》(No. 67) は, 動詞 qiz- 《赤熱になる, 炎々と燃える, 鮮紅になる》に遡及する。<sup>(30)</sup> 正しく同様にモンゴル語 hula'an, ulayan 《赤い》は, 派生語である。cf. 元朝秘史に於ける hula-<sup>xvii</sup> 《灼熱される》, モンゴル文語, ula-yi- 《燃えるように赤くなる, 赤くなる, (赤くなっている実について) 熟する》, カルムイク, ulā-<sup>xviii</sup> 《赤らむ, 赤くなる》。当該のモンゴル語には満州語 fulaxôn<sup>ixx</sup> 《やゝ赤味を伴う褐色の》, fulata 《眼のあたりを赤く環にして, 赤い眼をする》, fulgiyan<sup>xx</sup> 《赤い》が直接に結び付く。この最後の単語は, 明代ばかりでなく金代にも女真語に証明されている。

モンゴル文語, čaγayan, čaγān, 元朝秘史に於ける čaqa'an, čaqa'ān 《白い》は, 派生語である。cf. 元朝秘史の čayyi- 《(白く) 明るくなる》, モンゴル文語, ča-yi- 《1. 白くなる, 白く見える, 2. 蒼白になる; 灰白色になる》, カルムイク, tsā- 《白くなる, 白らむ, 明るくなる, 明るい》。直接に当該のモンゴル語に満州語 šanggiyan 《白い》が結び付く。それは, (明代の) 女真語に ŠA-gian なる形式で証明されている。この満州語及び女真語の形式は, ča-γān に遡及する。(満州語及び女真語に於ける š < č の変化は, 多数の例により確証を得ている。)

(26) この語のフィン・ウグール語の equivalent については J. Németh, *Probleme der türkischen Urzeit* 《Analecta orientalia memoriae A. Csoma de Kőrös dicata》, I. Budapestini, 1942, pp. 70-71. 参照

(27) 《Acta Orient. Hung.》, III. 3-4. 1953, p. 227

(28) G. J. Ramstedt, *Einführung...*, I. p. 140. 参照

(29) *Ibid.*, p. 88 参照

(30) G. J. Ramstedt, *Einführung...*, I. p. 112. 参照

チュルク語の *tolu*, *dolu* 《一杯の》(No. 60) は、派生語である。つまり、それらは、*tol-* 《満ちる》*to-d-* 《(腹について) 一杯になる》*to-q* 《満腹した》 $\leftarrow$  *to-* と結び付く。<sup>(31)</sup> Clauson がこのチュルク語単語に比較しているモンゴル語 *dü'üreng*, *dü'üren*, *dügüreng* についても同様な事が言える。元朝秘史の *dü'ür-* 《一杯になる》, モンゴル文語, *dügür-* 《満ちる, 一杯になる》を比較。

チュルク語の *qār* 《雪》(Ⅱ. 30) は、派生語である。cf. マフムド・カシュガリの辞書に *qa-* 《吹雪》がある。<sup>(32)</sup> 丁度, 同様にモンゴル語では *ča-sun* 《雪》が既に上述した動詞 *ča-yi-* 《白む》と一纏になる。<sup>(33)</sup> それらの例を増やす事も出来よう。

図表3の第2の一覧表一補足の単位一でもやはり副次的な語尾により付加された形式が目立っている。これらの諸形式は、言うまでもなく(問題によるとしても)様々な言語系統の「基礎語彙」更には仮定されるアルタイ祖語の語彙に入れられない。

チュルク語 *birlä* 《共に, 一緒に》は、かくの如くである。いずれにしても語根語は、*bir* 《一》である。Gabain の意見に依れば、これは、動詞 *biril-* 《合同する》から派生した副動詞である。それは、後置詞同様に使用され(…と共に), 《及び》の意味を有し先行名詞なしの省略(即ち独立)形式で《一緒に》を意味する。<sup>(34)</sup>

Brockelmann は、この単語は、*bir* 《一》と *ilä* (動詞 *il-* 《加わる》から派生した副動詞)の融合の結果、出来上ったと考えた。<sup>(35)</sup>

*birlä* は、*tünlä künlä* 《夜と昼》, *tangla* 《朝》, *yänilä* 《新たな》, *qatla* 《度, 回》等々に相似た構成を示す。Clauson によりモンゴル語 *qamtu* に対比されるチュルク語 *birlä* は、正にモンゴル語の *nigen-e* 《一緒に, ある場所に》に対応するが、それは、同様な文法形式で且つ同様の意味で既に元朝秘史に表われる。その語は、Dative-locative suffix によって複合された形式 *nigen* (*niken*) を示す。満州語 *emgi* 《集团的に, …と一緒に, 共に》も同様に *emu* 《一》と結び付けられるし、*ergi* 《方(側), 側面》と共にこの語の構成に外ならない。そればかりか満州語ではモンゴル語 *nigene* に形態的に同一の構成がある。即ち *emde* ( $\leftarrow$  *emu-de*) 《…と一緒に, 共に》。

《下の方へ》(省略的には《下へ》)を意味する後置詞としてのチュルク語 *qodi* (Ⅱ. 66) は、動詞 *qod-* 《置く》の副動詞に外ならない。<sup>(36)</sup> モンゴル語 *dooro<sup>xx1</sup>* は、格語尾 *-ro* (*-ra*, *-re*) によって補足された名詞形式 *doo* を示す。cf. *doodu* 《下の, 底の》, *dooyur* 《下の, 下へ》。Directive

(31) A. v. Gabain, *Altürkische Grammatik*, Leipzig, 1950. p. 74; C. Brockelmann, *Ostürkische Grammatik der islamischen Literatursprachen Mittelasien*, Lf. 1-7, Leiden, 1951-1954. p. 96. 参照

(32) C. Brockelmann, *op. cit.*, p. 96. 参照

(33) G. J. Ramstedt, *Einführung...*, I, p. 64. 参照

(34) A. v. Gabain, *op. cit.*, p. 136. 参照

(35) C. Brockelmann, *op. cit.*, p. 182.

(36) A. v. Gabain, *op. cit.*, p. 137; C. Brockelmann, *op. cit.*, p. 183 参照

の語尾 *-ysi* (*-gsi*) を所有する同様の語尾は, *dooysi* を与えた。満州語 *fejergi* に於ける二番目の成分 (component) — (形式 *fejirgi*—あながち誤りではない)《下方, 下方へ》—は, 単語 *ergi* 《側, 方向》である。満州語 *fejile* は, Locative *-la* の archaic な語尾によって補足された形式 *feji* 《下の部分》(<\**pergi*) を表わす。この語尾は, 満州語では副詞にのみ保存された。即ち *dolo* 《内部に, 中へ》, *wala* 《下に》。<sup>(37)</sup>

チュルク語 *örü* 《上へ》は, 動詞 *ör-* 《上る》<sup>(38)</sup> の副動詞である。

同意語として図表 3 に於て引用された形式 *yoqaru* (Ⅱ. 71) は, 格語尾即ち Directive の語尾 *-ru* (ある時には *-qaru*)<sup>(39)</sup> を有する同様なタイプを表わす。モンゴル語 *de'ere*, *dege-re* 及び *de'egši*, *dege-gsi* は, 同様に Locative 及び Directive の表示 *-ra* (*-re*) 及び *-ysi* (*-gsi*) による複合形式である。満州語 *dergi* 《上に》は, 自己の成分による *fejergi* に相似た構成である。満州語 *dele* 《上の, 最高の, 主な》は, Locative 語尾によって整備された形式に過ぎない。

モンゴル語及びツングース・満州語に表われる「基礎語彙」の語根語彙が認定される事に此処で注意すべきである。

チュルク語 *anta* 《そこに》(Ⅱ. 70) 及び *bunta* 《此処に》は, Locative case に於ける指示代名詞 *ol* と *bu* である。<sup>(40)</sup> 同様な事がモンゴル語に見られる。即ち *ende* 《此処に》は, Locative case に於ける *ene* 《この》を表わす。*tende* 《そこに》は, Locative case に於ける *tere* 《それ》である。満州語 *terede* と *eredede* は, 代名詞 *tere* 《その, それ》及び *ere* 《この, これ》の Locative case の廃れた形式である。これらの形式は, *ede*, *tede* なる形式に置き換った。

チュルク語 *kim* 《誰?》(No. 77) *qalı*, *qanta* 《どのように?》(Ⅱ. 68) *qačan* 《何時?》(Ⅱ. 72) *qanta*, *qanı* 《何処に?》(Ⅱ. 73) 及びモンゴル語 *ken* 《誰?》(No. 77) *ker* 《如何に?》(Ⅱ. 68) *keli*, *kejiye* 《何時?》(Ⅱ. 72) *qa'a* 《何処に?》(Ⅱ. 73) *qamtu* 《一緒に》(Ⅱ. 74) は, 同様に派生語である。それらの研究により我々は, アルタイ諸語の対比へ深すぎる程に連れ去られる筈である。<sup>(41)</sup>

図表 3 の二つの目録つまり夫々 100 個の単位は, 最低位の概念を表わす語が多分全ての言語に於ける「基礎語彙」の部分をしたであろうから以下に G. Clauson によって原初的と見做される単位を含む。図表 3 に提起された 100 個の単語がある言語の基礎語彙に入り得ると云う考えに基づくならばこのテーゼは, 争い難い。併し, お互から独立し発展した言語の基礎語彙は, 対応

[37] J. Benzing, *Die tungusischen Sprachen*, Wiesbaden, 1956, p. 84. 参照

[38] C. Brockelmann, *op. cit.*, p. 167. 参照

[39] A. v. Gabain, *op. cit.*, p. 140. 参照

[40] A. v. Gabain, *op. cit.*, pp. 93, 94. 参照

[41] アルタイ語の指示代名詞 *e* 及び *te* について一方指示, 疑問, 不定代名詞 \**qa-*, \**ke-*, \**ya-*, \**ye-* については G. J. Ramstedt, *Einführung in die altaische Sprachwissenschaft*, II – Formenlehre, Helsinki, 1952. pp. 74-81 参照。同様に A. v. Gabain, *op. cit.*, pp. 99-103. 参照; N. Poppe, *Introduction to Mongolian Comparative Studies*, Helsinki, 1955. pp. 225-231; J. Benzing, *op. cit.*, pp. 112-115. 参照

する祖語的共通の同一語彙に決して起らないと言う事を立場とはいえ全く考慮しないわけには行かない。フィン・ウグール語より示された若干の例で例解する。

図表3に於ける「診断上の単位」目録には色彩名称《白い》《赤い》《黄色い》がある。何故か《空色》は、存在しない。補足的な色彩より《緑》が導かれる。ハンガリー語ではこの名称の中《黒い》《白い》の二つは、フィン・ウグール語起源である。これに基づいてそれらは、ウグール祖語の語根語の範疇に入れられる。これらのハンガリー語をフィン・ウグール祖語の基礎語彙の中に入れる事は、更に慎重なアプローチを要する。<sup>(42)</sup> 単語 *vörös* 《赤い》は、名詞の *vér* 《血》より派生したものでありこの形式では最早フィン・ウグール語の基礎語彙に算入されない。9世紀までにハンガリー語は、チュルク語群より古代チュワシ語（原始ボルガール語及びハザル語）の単語 *kék* 《空色》< *kök* (Mo. *köke*) 及び *sárga* 《黄色》< *šarīγ* (Mo. *sira*) を借用した。<sup>(43)</sup> 単語 *zöld* 《緑》は、比較的に後にハンガリー語に入った（曾てそれは、単語 *kék* 《空色》に換った）。それ (*zöld*) は、多分あるイラン語（恐らくヤス語。<sup>xxii</sup> cf. オセッ語 *zāldā*）から入ったのであろう。<sup>(44)</sup>

所謂アルタイ諸語に於て状況は、かくの如くである。即ち《黒い》（チュルク語、モンゴル語で *qarangγu* 《暗い》は、勿論 *qara* からの派生である）、《空色》、《黄色》は、チュルク語、モンゴル語に共通である。《赤》、《緑》は、モンゴル語に於ける《白い》と同様にチュルク語、モンゴル語の構成としては異なるものからの派生である。結局《白》と《緑》がモンゴル語、満州語に共通である。

身体部の名称は、確かに夫々の言語に於ける「基礎語彙」に重要な地位を占める。「診断上の単位」によって認められた身体部の名称は、多分二次的構成であり借用されたものだろうと理解するのも亦困難ではない。この点についてはハンガリー語が9世紀までにチュルク語の名詞 *boka* 《くるぶし》、*gyomor* 《胃》、*kar* 《手》、*köldök* 《へそ》、*térd* 《膝》から借用したと解釈する必要はない。併し、この名称の中、三つ—《手》、《へそ》、《膝》—が如何してチュルク語の基礎語彙に入る事になったのか？（cf. 図表 No. 22, 26, Ⅱ. 24）非難の余地なきチュルク語、モンゴル語の対応形式（チュルク、*azīγ* 《犬齒》～モンゴル、*araya* 《臼齒》～満州、*aryan* 《齒》）がありながらチュルク語が知らないのに如何してフィン・ウグール語の「基礎語彙」は、恐らく同様に（「診断上」の）区別する名称として *agyar* 《犬齒》を所有する事になったか？ この明らかな矛盾は、「基礎語彙」が反駁し難い真正の、ある不変の目録に結び付け得ない事で説明がつく。実際は、基礎語彙は、本質的に言語更には語族で大いに異なり得るからである。とはいえこの矛盾は、言語年代学即ち語彙統計学の代表者によって保持されている。<sup>(45)</sup>

(42) Lakó Gy., *op. cit.*, I, pp. 188, 192 参照

(43) Z. Gombocz, *Die bulgarisch-türkischen Lehnwörter in der ungarische Sprache*, Helsinki, 1912. pp. 91, 114. (MSFOu, XXX) 参照

(44) Bárczi G., *A magyar szókincs eredete*, Budapest, 1951. p. 54 参照（此処ではそれは、アラン語<sup>xxiii</sup>起源の単語の中に加わる）。アルタイ諸語に於ては若干のアメリカ・インデアン語と同様に「基礎語彙」の中に期待に反して《空色》ばかりでなく《緑色》が含まれた事に注意しなければならない。W. Kotwicz, *Contributions aux études altaïques*. RO. VII (1929-1930), 1931. pp. 223-224 参照

(45) D. H. Hymes, *op. cit.*, p. 7

筆者は、Clauson の二つの目録から成る語源的対応が非常に分化し然も豊かに分岐した絡み合いを見付け出し得る事を示そうと努めた。筆者は、多数のそのような対応について自分としてはパーセント、計算次数の結論を敢えて出さない事を差当り示そうとした。この問題へのアプローチは、将来の研究に待たれる。

それと共に多数の対応を以て見れば言語年代学上の一致、不一致が全く新しいもののように見えると最早言う事が出来る。

オスマン・トルコ語とアゼルバイジャン語との分離及び一起源的同系の場合—チュルク語とモンゴル語等々との分離の年代のような問題の研究に於て言語年代学即ち語彙統計学の方法が如何なる真面目な助けを我々に示し得るかを立証する為に論証を付け加える必要はない。そしてやはりこの場合も起源論の為に言語年代学的方法を利用する事に関して D. H. Hymes の示した控え目さは、確実な根拠があったと思われる。<sup>(46)</sup> 要するにこの方法は、アルタイ諸語の同系及び非同系の証明としては役立たない。但し、私の意見では言語の非同系は、非常に証明ににくい。二つ（或は、それ以上）の言語が同系で一つの祖語に遡及する事のみが証明可能である。そのような証明は、不十分だと認められるかも知れないし拒否されるかも知れない。又より確かで非難の余地なき論証で我々が批判的立場を強いて留保する必要がなくなるまではこの批判的態度は、相当に長く存続するかも知れない。

アルタイ諸語の親族性の問題は、100年以上の間すこぶる活気ある審議の主題である。一再ならずその問題は、灼熱化したし然も現今論争は、更に一層激しくなっている。見地は、全く正反対である。即ちアルタイ語同系の支持者は、演繹の見地を受入れた。そして以後新しい証明を過度に提示しようと考えている。アルタイ語同系の反対者は、確固たる否定の下に始ったしあらゆる対応に関して二つの可能性—「偶然の一致」と「誤った親近」—だけを認める。

実際は同系関係即ちチュルク語、モンゴル語及びツングース・満州語が一つの共通アルタイ語に起源する事（朝鮮語そして同様に他の有り得べき関係は、さて置き）は、現代に至るまで未だ非難の余地なき論拠を得ていない。アルタイ語の共通性は、例えば印欧語及びフィン・ウグール語の関係に於て為されたような意味では証明されていない。これには二つの理由が有り得る。本当に所謂アルタイ語が共通祖語に遡及しない。従ってそれらは、親族的でないか。或は、反対にそれらは、実際に同系語であり然も現在知られているそれらの外貌（或は実に古い外貌）は、その同系関係が（印欧語、フィン・ウグール語等々の）既知の方式に依じては証明され得ない程特殊で不均等であって、祖語的共通に到達する方法を我々に確実性を以て何も指し示さないか。

(46) 要するに D. Hymes の結論 (*op. cit.*, p. 19) は、ここにある。つまり、「原則的に言語年代学は、比較方法がそれによって過程を整理した後のみ適用され得る。更に p. 31 には「100 個の単語による検査目録は、調査される太古の時間層として十分であり得るか？」が問われる。私の考えでは答えが肯定的である事は、明らかに違いない。二番目の問題は、かくの如し。つまり「その目録が太古の起源的關係の証拠を保障するか—この場合、答えは、度々、否定的に違いない」

所謂アルタイ諸語が本当に同系であるならばその同系関係は、不規則な方法によってのみ証明されるかも知れない。これらの諸言語の発展が如何なるものであったかも知れない方法によってのみ証明されるかも知れない。唯、この方法だけでは困難であろうが、別の方法ではそれらの言語の同系関係の診断は、実行不可能である。

アルタイ諸語は、印欧語に於ける程豊富で古い書写典拠に恵まれていない。アルタイ諸語の文献史は、決して印欧語に於ける程継続的でない。これらの言語群は、それらの多数の一員の分化の程度の点でも均等になっていない。アルタイ諸語は、分岐の点でフィン・ウグール諸語より更に貧弱である。そのみならずアルタイ諸語は、広大な土地に分散している。結局これらの言語及び二千年（或はそれ以上の年月かも知れない）の間にそれらの言語を話している諸民族は、書写典拠がこれについて証明するようにお互いの間に絶えず交渉を持っていた一最後のな地域を決して占める事のない一事情を考慮しなければならない。これらの相互にアルタイ諸語を豊かにする交渉は、それらの有り得べき共通祖語遺産を不可避免的に均一化した。史料によって見れば更に強い相互関係が一方ではチュルク人とモンゴル人との間に他方ではモンゴル人とツングース・満州人との間に確立した。

全てこれらの困難は、語彙研究に際して異常な程強く表面化する。所謂アルタイ諸語の各々が内部の語彙の改新の領域で与えられた可能性を大いに利用し又存在した語根語彙に基づいて構成された単語派生の体系をつくった。この発展の経過でタブー (taboo) の役割の研究が再三計画された。<sup>(47)</sup> 併し、この問題は、決してこの全ての範囲で審議されなかった。今までの所、未だ何故そして何時からチュルク語の身体部の名称の間にそれ程の派生語があるかを理解するのに成功していない。即ち adaq (《足》) < ad- (《歩む》), boʻyaz (《咽喉》) < boʻy- (《圧する, 圧される》), burun (《鼻》) < bur- (《吸込む, 嗅ぐ》); yüräk (《心臓》) < yür- (《動く》), qaraq (《眼》) < qara- (《見る》), tirnaq (《爪》) < tir- (《引掻く》)。<sup>(48)</sup> 若干のエスキモー語方言に於て身体部名称がタブー化されている事を指摘するのは、興味深い。<sup>(49)</sup> 研究されている諸言語は、交渉の期間におびただしい数の単語を譲渡したり借用した（勿論、借用及び譲渡の比率は、決して同一ではなかった）。借用語は、一再ならず言語の上部に於ける基礎語彙の諸要素を少し動かしたが、借用語は、そこから直ぐに消失した。この過程は、唯今の例によって傍証され得た。例えばモゴール語から古代モンゴル語の大部分の単語が消失した。つまりそれらは、自己の位置をタジック語の対応形式に譲ったが、その中で本来のイラン語単語を除きチュルク語その他の起源の語彙が目立っている事が注目された。結局、書写典拠により調べる事が出来ない彼らの長い歴史の間に所謂アルタイ民族が、彼らの

(47) これについては N. A. Baskakov, *Vestiges de tabou et de totémisme dans les langues des peuples altaïques*, 《VIII Congrès International des anthropologues et des ethnologues》Moscou. 1968. 参照

(48) Munkácsi B., *Türkisch burun*, KSz, XIV, 1914-1915, p. 352; J. Németh, *Probleme der türkischen Urzeit*, pp. 72-73. 参照

(49) K. Bergsland, *Is lexico-statistic dating valid?*, 《Proceedings of the XXXII. International congress of americanists. Copenhagen, 8-14 August 1956》, Copenhagen, 1958, pp. 655-656. 参照

言語の中に基層と上層で見做されねばならない対応や接触を為し得たのを忘れる事は出来ない。言語の基層に関する問題は、ツングース・満州語に従って既に提起された。<sup>(50)</sup> そればかりか消失したパレオ・アジア諸言語に全く特別の注意を割かなければならない。イエニセイ河の源流地域に6世紀より細々とサモエド諸語が存在していた事を考慮すべきである。この地域にそれらが存在していた事は、中国の典拠ばかりでなく地理的名称資料によっても確認される。今度は他と同様にモンゴル語、満州語の古い歴史は、朝鮮語を考慮しないでは再現され得ないであろう。

提示された所謂アルタイ諸語の語彙対応の極めておびただしい数は、その大半自分としては借用と結び付けられると考える。それにも拘らず、借用と云う唯一の標準によりこの広大なテーマにアプローチするのは、警戒しなければならぬ。借用語は、同じ時期によって年代が決定されない。二千年の古い以前からの交渉の著しい殆んど全ての時代が自己本来の語彙層を所有した。この層の借用語の年代学（時折、比較年代学のみ）は、専ら熱心で執拗な研究の結果によるのみ確立されるであろう。これらの層より更に古く且つより少ない層が自己の構成に於て疑いなくアルタイ祖語の共通語彙の痕跡を所有するであろう。唯もしそのようなものがあつたとすれば。この層の数率に関してはこの点で誤解しないように。P. Aalto により挙げられた教訓的な例に注意して頂く。即ち彼は、スウェーデン語、ギリシア語に於ける印欧語起源の共通対応形式の数は、殆んど六十を越えず尚、その中、若干の単語は、診断するに困難である事を示した。ifjuw! : perisi 《去年》参照。<sup>(51)</sup> この両言語の語彙資料を100個の「診断上の単位」と100個の「補足的単位」の目録により比較対照するならば印欧語の親族性は、さて置きこれに基づいてスウェーデン語とギリシアの起源的關係について客観的に研究する事は、とても不可能であろう。アルタイ諸語の歴史の飽和した変化によって当然語彙統計学的図表は、不規則性を示すに役立つ事が考えられる。即ち起源の同系の場合、様々のアルタイ諸語は、アルタイ語の「基礎語彙」との共通要素の非常に低いパーセントを示し且つ言語分化後の語彙に關係する要素の非常に高いパーセントを示す。

私の意見では語彙統計学即ち言語年代学は、将来のアルタイ語研究を決定しない。もし、或る日の事我々が所謂アルタイ諸語間の起源的關係の仮説を止むを得ず断念してもアルタイ語研究を止める如何なる理由もないだろう。つまりその場合チュルク語学者もモンゴル語学者もツングース・満州語学者も彼等自身としてアプローチさえ出来ないそれらの深い法則性及びこれらの言語間の強い交渉の解明が彼等の目的になる。複雑な問題と言われる領域での学問上の論争は、それらの多くの詳細を解明する事や多数の貴重な著作の出現を促進するが、その中でアルタイ学を十分に豊かにしているアルタイ語族論の秀でた反対者、G. Clauson の論著は、重要な地位を占める。

(50) Г. Д. Санжеев, *op. cit.*, pp. 707-708 参照

(51) P. Aalto, Uralisch und Altaisch, *UJb*, 41, 1969, p. 334.

訳者注

i) Z. Gombocz の説については N. Poppe, Introduction to Altaic Linguistics. *Ural-Altaische Bibliothek* XIV. Wiesbaden. 1965. pp.132-133 参照

ii) 満州語は、実際は死語ではなく満州の愛琿付近や新疆地方には数万の満州語の話し手が残存する。(服部四郎『日本語の系統』東京, 昭和34年, p. 256; 池上二良「トゥングース語」服部四郎他編『世界言語概説』下巻所収, 昭和30年, pp. 448-449 参照)

iii) ダグール (дагурск.) は、此処ではハイラル (Hailar) 方言ではなくブトハ (Butkha) 等の他方言を指し又, Ts. とはダグール語のチチハル (Tsitsikar) 方言を指すと考えられる。

iv) Iv. は, A. O. Ivanovski が調査したチチハル方言を指す。(A. O. Ивановский, *Mandjurica. I. Образцы солонского и дахурского Языковъ*. Санктпетербургъ, 1894. 参照)

v) 原文に表われる mörsn は, mör̄sn の誤記である。(G. J. Ramstedt, *Kalmückisches Wörterbuch*, Helsinki 1935, p. 268 参照)

vi) 満州口語では vəraa [vəra•] であり 'the pubes, the buttock or buttocks' を意味する。(山本謙吾『満州語口語語彙集』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 1969, p. 5. 「人体」98項)

vii) fujuri. 1) Unterlage. Grundlage; 2) Ursprung; 3) erblich (Erich Hauer, *Handwörterbuch der Mandschusprache*, I-III Wiesbaden. 1952-1955 p. 311)

ma. fužuri <\*pužugūri <\*pužagūri 'Herkunft' = mo. ižayur, mmo. huža'ur id. (N. Poppe, *Vergleichende Grammatik der Altaischen Sprachen*, Teil 1. Wiesbaden. 1960. p. 139)

viii) ハルハ方言, хумаг '1) земля; 2) что-либо рассыпчатое', хумхи 'пылинка' (А. Лувсандэндэв, *Монгольско-Русский Словарь*. Москва, 1957, стр. 564)

ix) 満州語 furi は、以下の文献で全く実証されない。『五体清文鑑』, 羽田亨編 『満和辞典』, E. Hauer, *Handwörterbuch der Mandschusprache*, И. Захаров. *Маньчжурско-русский словарь*. Петербург, 1875. 山本謙吾著『満州語口語基礎語彙集』。

x) hele '唾', helen '敵状を知れる人; 捕虜' (羽田, 前掲書 p. 199), hele. 1). Sprachvermögen. 2) für helen; helen 1) (mong. kelen „Zunge, Sprache, Agent“) der Sprache des feindlichen Landes Kundiger, Agent, Spion; 2) für hele. (E. Hauer, *op. cit.*, p. 428)

xi) mo. utasun 'Faden, Zwirn', mmo. hutasun <\*putasun id. = ma. futa <\*puta, 'Strick' = jak. utax <\*putak 'Strähne, aus denen dicke Stricke geflochten werden'. (N. Poppe, *op. cit.*, 1960. p. 51)

xii) 『元朝秘史』VIII. 40. b; IX. 8. b に「闊<sub>ト</sub>失<sub>ハ</sub>都<sub>ハ</sub>周<sub>ハ</sub>」kobši-Idu-ju 《共寒着》が表われる。

xiii) 原文に表われる bei は, bei- の誤記である。Г. М. Васильевич, *Эвенкийско-Русский Словарь*. Москва, 1958, стр. 73 参照

xiv) 原文に表われる bei は, bei- の誤記である。Г. М. Васильевич, *указ. соч.*, стр. 73 参照

xv) 原文のカルムイク方言の angv は, angv- の誤記である。(G. J. Ramstedt, *op. cit.*, 1935, p. 11 参照)

xvi) [2] は, 原文には記されていないが, E. Hauer, *op. cit.*, 1952-1955. p. 708 の記述, 1) grün, 2) blaugrün, blau: ... に依っていると思われるので [2] を補った。

xvii) hulal- は、『秘史』VIII. 33b に一例次のように表われる。即ち, 忽刺命不恢《紅有的》hulalun bukui。

xviii) 原文に示されるカルムイク方言 ulā は, ulā- の誤記である。G. J. Ramstedt, *op. cit.*, 1935, p. 448 参照

ixx) 原文の fulaxón は, E. Haenisch 式 (Erich Haenisch, *Mandschu-Grammatik*. Leipzig. 1961 参照) の転写であり Möllendorff 式 (P. G. von Möllendorff, *A Manchu Grammar*, Shanghai, 1892 参照) では fulahūn となる。

xx) N. Poppe, *op. cit.*, 1960, pp. 100, 120 参照

xxi) モンゴル文語は, dooro ではなく doora (doura) とするのが適当である。(F. D. Lessing, *Mongolian*.)



*English Dictionary*, Berkeley and Los Angeles, 1960. p. 266; J. É. Kowalewski, *Dictionnaire Mongol-Russe-Français* I-III. 1844-1849 p. 1786 参照)

xxii) ヤス (Yas) は、アラン人 (Alans) の自称名 *As* の variant と言われる。ヤス語について詳細は、J. Németh, *Eine Wörterliste der Jassen, der ungarländischen Alanen*. (Abhandlungen der Deutschen Akademie der Wissenschaften zu Berlin. Klasse für Sprachen, Literatur und Kunst, Jahrg. 1958, Nr. 4.) 及び I. Gershevitch の同著書評, *BSOAS*, Vol. XXIII : Part 3, 1960, pp. 595~596 参照。(同著書評の所載について西田龍雄教授より御教示を頂いた)

xxiii) スキタイ・アラン方言については I. M. Oransky, *Old Iranian Philology and Iranian Linguistics. Fifty Years of Soviet Oriental Studies*, Moscow. 1967. pp. 20-21; B. C. Расторгуева, *Иранские Языки. Советское Языкознание за 50 лет*, Москва. 1967. стр. 178 参照